TAKE FREE

MA・SO・BO通信

2021 3▶4

［寄稿］「コロナ禍に今　人形劇ができること」
人は表現したい、そして集いたいのだ！

人形劇団えりっこ主宰　竹田　洋一

ビクッ　とする電話の音。　いろんな事態が頭をよぎる。
はい、もしもし・・・あー、そうですか分かりました。
こんな時ですから・・・いや、大丈夫です。
そちらも大変ですね・・・また宜しくお願いします。

あたりまえの日常が消え、異常な日常があたりまえになった。様々な悲惨な状況が報道されているなか、創造団体は公演等が全て中止になり収入が途絶え、劇団も個人も補助金、支援金だよりで辛うじて生きている状態が続いた。
７月頃からは、保育園、幼稚園を中心に上演が再開されてきたが、日本児童・青少年演劇団協同組合の報告では、
７月段階で約３０００ステージのキャンセルがあったとのこと。当然今も増え続けているだろう。創造団体が公演ができないことは、鑑賞の機会もないことを意味する。子どもたちは一体どうしているのだろう、医療体制の逼迫と経済のダメージのみが報道され、子どもは家庭に任され置いてきぼりだ。　４ヶ月半ぶりの公演の日　ウイルスを持ち込まないようマスクは勿論、消毒液を持って向かった。
何より園の様子が気がかりだった、しかし反対に仕事が出来ない劇団の状況を心配されてしまった。先生によると環境の悪化による子どものストレス状態は想像以上に深刻であるとのこと、先生方の心労もまた計り知れない。マスクによって伝えたいことの２０％が伝わらないと言われている。乳児はマスク越しの保育士の表情を読み取ろうと、
じっと眼を見つめるという。それは生きるための本能なのだろう。密に触れ合うことで信頼し合う、そして遊びを通して社会性を学び、知性が育まれる最も大切な乳幼児期、大きなダメージがあることは容易に想像がつく。そのストレス状態を如何に和らげるか、様々な行事が中止になるなか何とか感染リスクをコントロールすることで楽しい時間を作ってあげたいという先生方の想いが胸にしみる。
その中での人形劇の上演、変わらぬ子どもたちの笑顔と歓声に思わず目頭が熱くなった。

先日リモートによる勉強会で紹介された、IPA（子どもの遊ぶ権利のための国際協会）発行の「危機的状況における遊び」の中に、子どもが病気、死、孤独などの辛いテーマが含まれる遊び、例えばTVやネットで見た苦しんでいる人や助け合うシーンを表現したり、葬式の様子を演じたり、怒りや恐れなどを面白おかしくしたり、大げさなものにしたりする行動は大人には苦痛を感じるものだが、子どもにとってそれは困難や恐怖、混乱に対処する力を発達させるために有効なものであるとの記述があった。
確かに、子どもの反応に何かコロナ以前との質の違いを感じたことがあった、おだった大きな反応や、無理やり笑いたがる行動は強いストレス状態だった可能性がある。
社会は、大人は子どもの状態に対して適切な対応を学ばなければならない。

子どもはPlay（遊び、演じる等）することで傷み　疲れた心を癒やし、無条件に笑いストレスを発散することで自分の感情とうまく付き合えたり、困難に向き合い人生で直面する問題を乗り越える力を高めることになるという。人生に迷った時、絶望した時に芸術に救われた話を聞く、語らずともそう感じている人はきっと少なくないと思う。
だからこそ、身体をふるわせる生の舞台を届けなければならない。プロとして、子どもと出会う人形劇が果たさなければならない大切な役割は、最高の芸術を届けること、そして次の世代に文化を伝える事だとの想いを新たにできたのは、ある意味ではコロナ禍のお陰かも知れない。

先人たちが情熱を注ぎ拓いて来た人形劇文化運動に支えられて今の私たちがいる。
その想いの形として全国の人形劇人の憧れる日本で最初の公立の人形劇場こぐま座。そして、こどもの劇場やまびこ座がある、そこで創造される人形劇は完成度が高い、特に中高生、大学生のレベルは眼を見張るものがある。館長を中心に職員の指導力によるものと思うが、劇場がのびのびと自分を表現する場を作ったことが大きい。能率主義がはびこる中、なんでも１人で早く出来ることが評価される、だが１人では出来ないから助け合う、そのことが相手を尊重することにつながる。協力して創造する喜びを体感する大切な場所がここにはある、人形劇とともに育った子どもたちが、社会人となって仲間を作り創造活動を続けること。そして、想像力あふれる子どもを育てる側に立つことを期待したい。プロになって人形劇を推進する人材が育つことも夢だ。素敵な時間を持った子どもたちの未来はきっと明るい。必ずコロナ禍の逆境も糧にするだろう、今は力を蓄え未来を想像しようと思う。
人は表現したいのだ、そして集いたいのだ。

略歴
東京の人形劇団ブークで13年間活動の後、
1992年に人形劇団えりっこに参加。
日本舞台監督協会会員
日本人形劇人協会会員
国際人形劇連盟日本ウニマ会員
全国専門人形劇団協議会加盟
NPO北海道人形劇協会理事
札幌人形劇協議会会員
拓殖大学北海道短期大学保育科非常勤講師
全国児童・青少年演劇協議会 北海道ブロック 運営委員

子どもを「教える」「育てる」オトナになるために　あいうち・としかず

4回の連載の3回目になりました。オトナのパワーが（それがどんなに善意からでも）、子どもたちをムーミンの物語の中に出てくるニンニのように、「姿が見えない」状態にすることがあると、前回私は書きました。

そのなかで、私はうかつにも、子どもたちが、生き生きと自分を表現し、「目に見える子」、「姿を見せる子」に育つようにするのは難しいことではなく、おとなたちは、子どもたちの声が聞こえたら、それを自分たちのモノサシですぐに判断したり評価せずに、子どもたちのモノサシを貸してもらって理解すればよいのだと述べました。

しかし、オトナが子どもたちと「良い関係」で接するのはそう簡単ではありませんね。何といっても、これまでずっと権威主義的に子どもと接してきたオトナを、子どもたちは容易に信用してくれないでしょう。信頼されるまでには、おそらく何回も子どもたちにテストされ、少しずつ警戒心を解いてもらうプロセスが必要なのだと思います。

忘れないうちに指摘しておきたいことがあります。子どもたちが、いかにも優しそうによく話を聴いてくれるフリをする「悪意あるオトナ」に騙されて被害にあうことがあるのは、その子たちがそれまで、心がつぶれるほど抑圧されてきたからに他なりません。本当に話を聴いてくれるオトナと頻繁に出会っていたら、子どもたちを騙すための偽りの「優しさ」なんぞ、簡単に見破られてしまう筈ですし、変だと思ったことを相談するオトナが身近にいた筈です。

わが身を振り返ってみても、私たちオトナには、子どもが「姿を見せて」育っていくのを助けられるオトナになるための努力が必要なのではないかと思うのです。少し一緒に考えてみましょう。そうすることのできるオトナであるための第一の要件は、自己肯定感がすべての人に大切であることを分かっていること、できれば、自己肯定感をもてるようになった経験があることでしょう。これは、自分が思っている「成功モデル」を他者に求めることとは違います。

そして、第二の要件は、課題解決のための選択肢を豊かに持っていることです。オトナ自身が、たくさんチャレンジし、たくさん失敗してきた経験を持っていることが望ましいわけです。

このエッセイの読者の皆さんは、きっと子どもたちが自由に自己実現できる社会を目指しておられることでしょう。でも、そのためにまず実現すべきなのは、オトナ自身が自由で、自己肯定感をもてる社会です。「子どもの権利」を守れるオトナは「自分の権利」を大切にできるオトナだけだからです。

AIUCHI TOSHIKAZU
相内 俊一　先生

PROFILE
北海道教育大学、小樽商科大学、同大学大学院ビジネススクールで、政治学、公共政策・経営学などを教え、退職後はNPOの代表として、高齢者の介護予防、認知症予防、高齢者と子どもの助っ人センターなどの活動に取り組んでいる。
こぐま座・やまびこ座運営委員（2018～）。

MA・SO・BO

本シェルジュ

KONNO MICHIHIRO
今野 道裕　先生
名寄市立大学保健福祉学部
社会保育学科教授

PROFILE
1955年生まれ
高校時代より人形劇活動を始める
小学校教員28年を経て
2006年～市立名寄短期大学教授

北海道人形劇協会理事
芸術と遊び創造協会会員
日本福祉文化学会会員
北海道教育学会会員
北海道芸術教育の会

ひとり人形劇団「オホーツク風雲ワクワク団n」として活動中
著作：『作ってあそべる製作ずかん～3・4・5歳児の保育に～』（学研・2013年12月）

本の紹介④『覚え書きマンガ日本の歴史』（全1巻　石ノ森章太郎　中央公論社）

マンガ世代です。手塚治虫は神様です。そしてもう一人あげるとするなら、天才石ノ森章太郎。『サイボーグ009』『サブと市捕物控』『ホテル』『仮面ライダー』・・・、ああ切りがありません。

その石ノ森章太郎が『マンガ日本の歴史』（全55巻）という学習マンガ全集を出しています。その巻末付録、メモ書き的スケッチを集めた本がこれ。

人形劇や児童劇に関わって脚本等を書いていると、時々時代考証とかをしたくなることがあります。そんな時に大いに助けてくれるのがこの本です。

マンガは時に写真よりも正確に特徴や雰囲気を伝えます。絵にはメモ書きも豊富で理解を助けてくれます。

何より縄文時代から江戸時代が終わるまでを、石ノ森章太郎の絵で一冊で楽しめるなんて、こんな素敵なことはありませんね。

657 美術館からのお知らせ
～657cmのちいさな美術館～

小寺卓矢・森の写真絵本の世界

北海道十勝在住の写真絵本家 小寺卓矢さんの写真絵本原画展を開催。
■期　間：3月2日（火）～4月11日（日）
■時　間：9：00～17：00
■入場料：無料
■会　場：札幌市中島児童会館・こぐま座内

子ども文化セミナー
写真絵本作家が考える〈森・ことば・子どもたち〉

表現活動を支える思いや、子どもたちに寄せる思いを語ります。
■日　時：3月6日（土）10：00～11：30
■対象・定員：高校生以上40名
■参加費：1,000円
■会　場：札幌市中島児童会館

2/11（木・祝）より電話受付開始

子ども向けワークショップ
創ってみよう！世界で一冊だけの写真絵本

お気に入りの写真で、オリジナルの写真絵本をつくります。
■日　時：3月6日（土）13：00～16：00
■対象・定員：小学生～高校生（各回20名）
■参加費：500円
■持ち物：自分で撮影した写真6枚
※足りない場合や持参できない場合は、こちらで用意した写真を使用します。
■会　場：札幌市中島児童会館

2/11（木・祝）より電話受付開始

編集後記

第4号を作成して、「本質を見抜く力」をつけたいなと感じました。本紙にも、“子どもたちは、苦しいことや辛いことをあそびを通して体験することで乗り切る力をつける”とありました。最近は、昔話の最後を原作とは違うハッピーエンドにすることも少なくないと聞きます。しかし、残酷だ、などと良いことばかりにしてしまうのはどうなのでしょうか。

一部分にばかり惑わされず、本当の意味や価値を見抜く力が試されます。（山澤）

【お問い合わせ・申し込み】
札幌市中島児童会館　TEL 011-511-3397
札幌市こども人形劇場こぐま座　TEL 011-512-6886
住所：札幌市中央区中島公園1－1
（地下鉄南北線中島公園駅下車3番出口より徒歩1分）

発行／札幌市中島児童会館・札幌市こども人形劇場こぐま座指定管理者／公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会